



# クアツガ復活計画(南アフリカ)



雄大な岩山の麓に広がる緑豊かな自然保護区に、その動物の群れはいた。シマウマのようだが、臀部(でんぶ)や脚部にしま模様がほとんどない。「あれが『クアツガ』だよ」。南アフリカ西ケープ州の保護区の管理員バーナード・ウディングが、口笛を吹きながらゆっくり群れに近づくと、かつて南アの草原には群れをなしたクアツガが駆け回っていた。しかし、入植した白人が狩猟で乱獲、1883年に最後の1頭がオランダの動物園で死んだ。それから100年余を経た1987年、同種のシマウマを選別交配させてクアツガの復活を目指す計画が、動物園が絶滅したウシの

雄大な岩山の麓に広がる緑豊かな自然保護区に、その動物の群れはいた。シマウマのようだが、臀部(でんぶ)や脚部にしま模様がある。06年2月、74歳で死去したが、「人類の愚かな過ちを正したい」という遺志はウディングら仲間によって引き継がれた。

▽そこから始まった体の後ろ部分が茶色でしま模様がなく、ロバとシマウマを足して2で割ったようなクアツガは、長く「独立種」と信じられてきた。だが、剥製技師として1959年から勤務したラウは「シマウマの一種」と確信した。ドイツ生まれのラウは子どもころ、ドイツの動物園が絶滅したウシの

## 創始者の遺志を継ぐ人々



南アフリカ西ケープ州の農場で行われた定例会議後、談笑するエリック・ハーリー(中央)ら「クアツガプロジェクト」のメンバー。欧州各地に残るクアツガの剥製を写したポスターも作った(中野智明氏撮影)

# 「人類の過ち正したい



一種を交配で復活させようとした取り組みに感銘を受けたことがある。欧州各地を回り、残っているクアツガの剥製23体のうち21体を調査。動物学者にも相談するなどし、特徴が似たシマウマの掛け合わせによる復活計画を立案した。

博物館にある標本から採取した肉片のDNA鑑定などを米国の大学に依頼、その結果、クアツガはサバンナシマウマの亜種と判明した。

「一見見た感じは、多くの動物をい込んだ『人類の修正を目指す』クトチームは、直に受け止める。『保護』は『保護』元『プロジェクト』強調。『既に復活に成功した』が、批判を考慮ウ・クアツガとにした」とプロジェクトで中心人物だ

「全てはそこから始まった。クアツガの遺伝子がサバンナシマウマに残っているなら、4世代ほど交配が進めばクアツガの特徴を持つ動物が生まれると考えた」。発足時からプロジェクトに携わる遺伝学者で元大学教授のエリック・ハーリー(左)が振り返る。

87年、しまの少ないサバンナシマウマ9頭を隣国ナミビアから移送し、交配を開始。10人足らずで始めたプロジェクトだったが次第に拡大し、交配に使うシマウマも百数十頭に増えた。2005年、クアツガに良く似た第3世代の子馬が誕生する。ラウらの努力が実を結んだ瞬間だった。

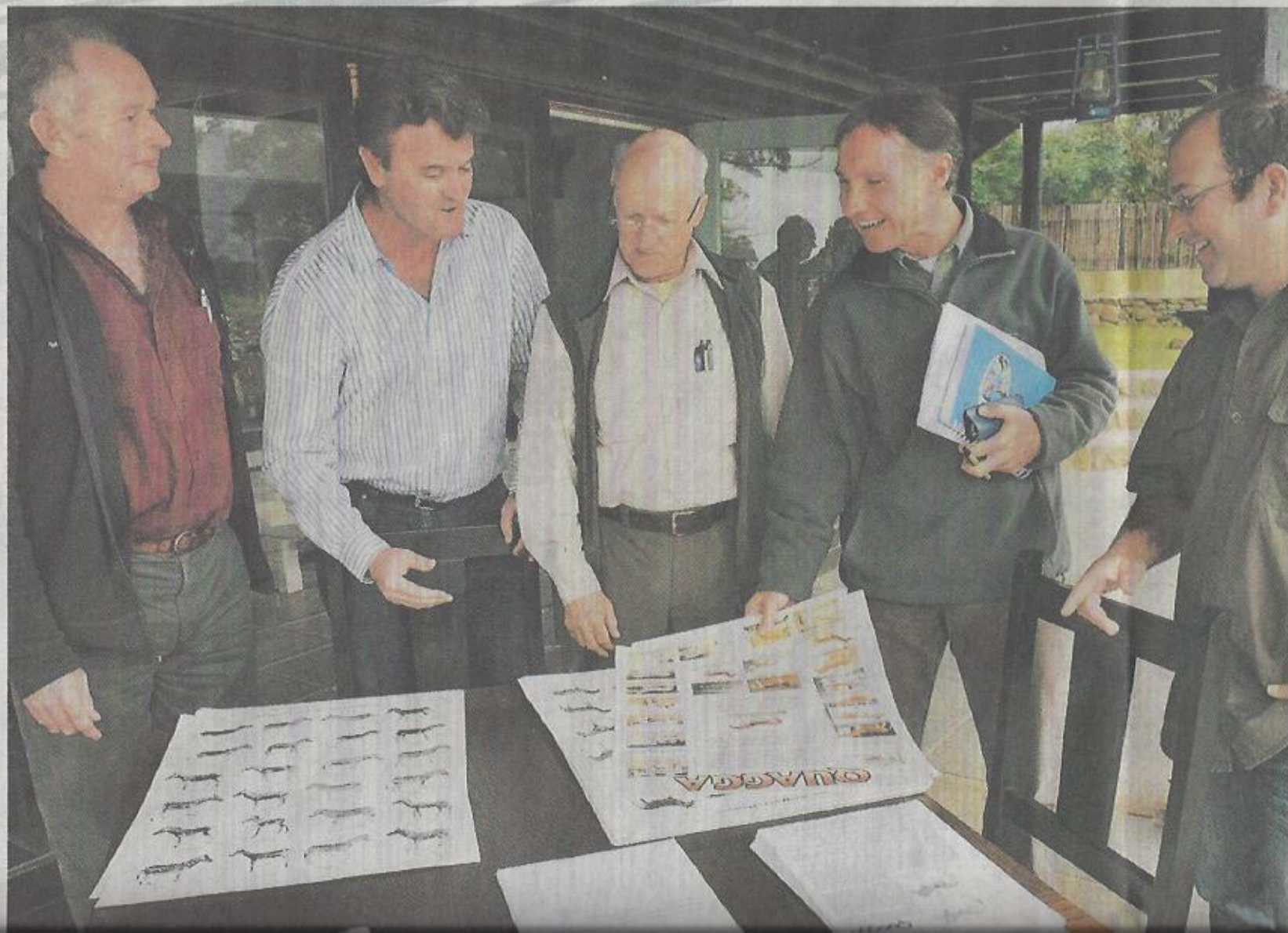
ただ、プロジェクトに対しては当初から、科学者や環境活動家らの批判も多数あった。「自然の操作だ」「絶滅寸前の動物を救うべきだ」「実物の剥製に比べ体の色が白

技術が「夢物語」可能に

有史以来、乱獲や自然破壊など人類の活動の影響で多くの生物が地上から姿を消した。国際自然保護連合(IUCN)によると、世

# 地球人間模様

## 絶滅動物「クアッガ」復活計画



# シマウマを選別

が臀部や脚部にしま模様がほとんどない。「あれが「クアッガ」だよ」。南アフリカ西ケープ州の保護区の管理員バーナード・ウディング(39)が、口笛を吹きながらゆっくり群れに近づく。かつて南アの草原には群れをなしたクアッガが駆け回っていた。しかし入植した白人が狩猟で乱獲、1883年に最後の1頭がオランダの動物園で死んだ。それから100年余を経た1987年、同種のシマウマを選別交配させてクアッガの復活を目指す計画がケープタウン周辺で始まった。

プロジェクト創始者のレイノ志はウディングら仲間によって引き継がれた。体の後ろ部分が茶色でしま模様がなく、ロバとシマウマを足して2で割ったようなクアッガは、長く「独立種」と信じられてきた。だが、製皮師として1959年からケープタウンの博物館に勤務したラウは「シマウマの一種」と確信した。

受けたことがある。欧州各地を回り、残っているクアッガの複製23体のうち21体を調査。動物学者にも相談するなどし、特徴が似たシマウマの掛け合わせによる復活計画を立案した。



南アフリカ西ケープ州の自然保護区よりクアッガに近づいたシマウマの一部分のしま模様が少ない

マウマに代ほとを特徴を考えたクトに教授の工が振り返ら移送シマウマ2005年た第3世ラウらだった